中之条町発掘調査報告書第３集

大塚遺跡群

五十嵐遺跡

昭和59年度発掘調査概報

1984

群馬県吾妻郡中之条町教育委員会

序

昭和57年より開始された団体営大塚地区ほ場整備事業は、今年度で、３年目を迎える事となりました。

大塚地区は、以前から埋蔵文化財包蔵地として周知されておるところであります。これら大切な文化財を保護･保存し､後世の人々に伝えていくことは、私たちに課せられた任務であります。

今回ほ場整備により、道水路部分及び削平する部分について記録保存のため発掘調査を実施いたしました。

調査は、平安時代にかけた住居跡、遺物等が発見され、この地域の歴史を解明していくに貴重な資料が多く得られ、ここにその成果の一端を報告いたします。

発掘調査に際して、御指導・ご協力をいただきました関係各位に謝意を表わすと共に、本書が多くの方々にご活用されることを念じて序文といたします。

昭和60年３月

中之条町教育委員会
教育長　塚田　　真

例　　言

１．本書は、中之条町大塚地区ほ場整備事業に伴ない事前調査された中之条町大塚遺跡群五十嵐遺跡の発掘調査概報である。

２．発掘調査は中之条町教育委員会が群馬県教育委員会の指導を受け実施した。

３．発掘調査の期間は、昭和59年６月14日～昭和59年７月26日である。

４．本書の写真・トレース・編集は丸山公夫が行なった。執筆は、遺物集中区・その他の遺物は綿貫綾子が、出土鉄製品・その他の時代の遺物は大塚昌彦が、その他は丸山が行なった。

５．遺物整理は、丸山が中心となり行なわれた。

６．発掘調査・本書作成にあたり、下記の方々の御協力をいただきました。

群馬県教育委員会文化財保護課、中之条町文化財専門委員各位、渋川市教育委員会、株式会社測研、井上唯雄、近藤功、栗田栄、大塚昌彦、綿貫綾子、横沢克明、五十嵐信、南雲芳昭、白石典之、大塚美恵子。

目　　次

序……1
例言……1
調査に至るまで……2
遺跡の立地と周辺の遺跡……2
発掘調査の概要と経過……4
遺構と遺物……4
　１号住居跡……4
　２号住居跡……6
　３号住居跡……9
　土坑、焼土遺構、配石墓……13
　遺物集中区、その他の遺物……14
　出土鉄製品……15
　その他の時代の遺物……16
おわりに……17

調査に至るまで

中之条町大塚地区は、昭和57年度より61年度にわたり大規模な土地改良が、中之条町役場農林課及び大塚地区団体営ほ場整備事業組合により実施されることとなった。

今年度ほ場整備事業地区は、『群馬県遺跡台帳西毛編II』No.3069に記される縄文時代集落跡の宿割遺跡に近接する地域にあり、群馬県教育委員会文化財保護課によりほ場整備事業地区全域を試掘し、五十嵐地区において遺構が確認された。中之条町教育委員会は、群馬県教育委員会の指導をうけ、町農林課に大塚地区ほ場整備事業予定地内に埋蔵文化財の存在することを通達した。

本遺跡の取り扱いについて町教育委員会は、県教育委員会の指導のもと町農林課との間に協議が行われ、埋蔵文化財を破壊する通路予定地を急遽記録保存のための発掘調査を行うことになった。

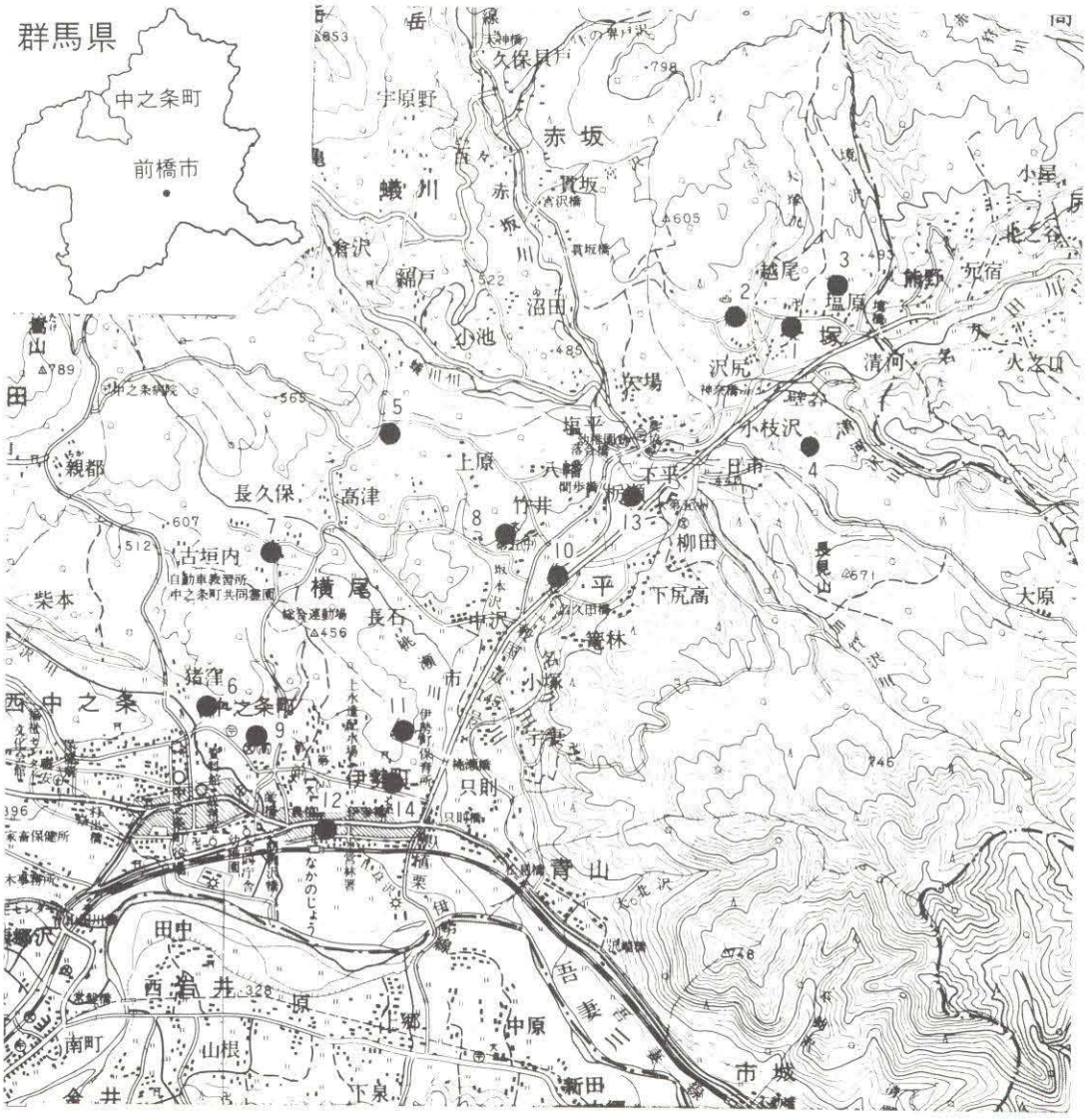
中之条町教育委員会は発掘調査を行うにあたり丸山公夫を臨時職員とし、群馬県教育委員会文化財保護課に発掘調査指導を依頼し、同文化財保護主事洞口正史を調査指導者として、昭和59年6月14日より発掘調査を実施することになった。

遺跡の立地と周辺の遺跡

中之条町は群馬県の北西部に位置し、北境において新潟県に接する。東部は小野子山(1201m)に向かって山地がのび、北部は稲包山（1597.7m）をはじめとする1000m程度の稜線により北縁をなす。西部は木戸山（1732m）他1700m級の山地が連なり暮坂峠（1060m）にかけてしだいに低くなり、南部の吾嬬山（1181m）、薬師岳（974 m）へとつづき、中之条町中心部をとり囲む屏風のようになっている。南部は吾妻川に沿って盆地がひらける。中之条盆地に流れこむ吾妻川四万川、名久田川流域には数段の河岸段丘の発達がみられ、これらの段丘面は重要な平坦地であり、集落が散在し耕地が広がっている。

遺跡の所在は、中之条町大字大塚1718～1720番地であり、市街地より北東約7km、国道 145号線沿い北側にある。地形は、名久田川右岸に発達する河岸段丘面上で、北部は第三紀の山地があり、南部は名久田川を狭み第四紀火山の小野子山がそびえる。名久田川は西南部へ流下し、中之条の段丘平坦面へと注いでいる。本遺跡は、北部の山地から流出する大塚沢の小扇状地面上にあり、南側は名久田川の段丘平坦面につづいている。

本遺跡の周辺には多くの遺跡が知られている。縄文時代の遺跡として本遺跡に近接する(2)宿割遺跡、(3)諏訪原遺跡があり、名久田川対岸には(4)寄居原遺跡、名久田川を流下した右岸山あいに(5)奥山原遺跡がある。弥生時代は、中之条町営プール脇の(6)法満寺遺跡。古墳時代は、集落跡と思われる(7)長久保遺跡、(8)名久田中学校遺跡、(9)法満寺土師遺跡があり、墳丘として(10)樋塚古墳がある。その他江戸時代の水牢跡(11)真田水牢遺跡、などの遺跡が『群馬県遺跡台帳』に記されている。台帳に記されている遺跡以外に名久田川両岸の山あいにはいたる所で縄文土器片が採集さ



第Ⅰ図　大塚遺跡群五十嵐遺跡の立地と周辺の遺跡　　縮尺50,000分の１

１五十嵐遺跡　２宿割遺跡　３諏訪原遺跡　４寄居原遺跡　５奥山原遺跡　６法満寺遺跡
７長久保遺跡　８名久田中学校遺跡　９法満寺土師遺跡　10樋塚古墳　11真田水牢遺跡
12伊勢町遺跡　13平古墳群　14天代瓦窯遺跡

れる。また中之条駅周辺の町並みは、弥生時代の集落跡と思われる(12)伊勢町遺跡があり後期壺形土器が出土している。樋塚古墳に近接して名久田八号墳等の(13)平古墳群が存在する。さらに1982年調査された平安時代窯跡の(14)天代瓦窯遺跡がある。多くの遺跡は工事等による発見や表採として確認されているもので、今後の詳細な調査により多くの遺跡が確認されることは疑いなく、今後の調査が期待される。

発掘調査の概要と経過

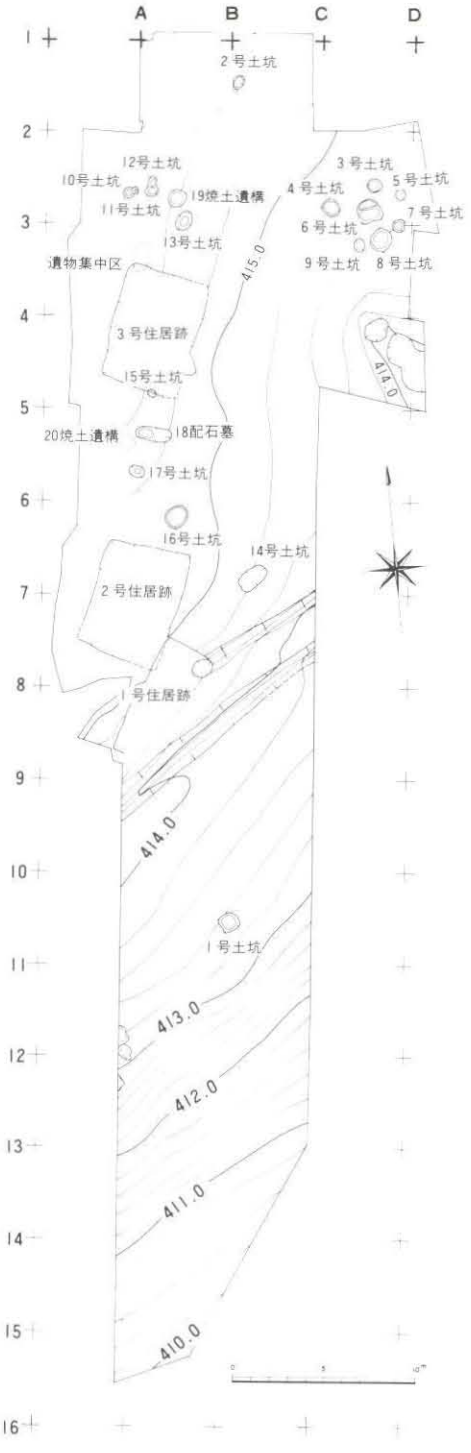
本遺跡は、中之条町大塚地区ほ場整備事業に先がけて行われた発掘調査である。調査対象は新設予定の道路部分で、調査面積は1200㎡である。

調査方法はグリッド方式を採用し、ほ場整備道路予定地に５ｍグリッドを設定した。グリッドの主軸は磁北で５°−30′東偏している。

調査は、昭和59年６月14日より20日前後を予定して開始された。

調査に先がけ６月４日より耕作物等の除去、グリッド設定など調査準備を進め、６月14日大塚地区老人クラブの方々の協力を得、開始された。調査はＢ区より開始され、19日までに集石土坑１基を検出して調査を終了した。次にＣ区を18日より21日まで行い、最南部の段丘平坦面に軽石層が確認され、軽石除去の結果本区より何ら遺構は検出されなかった。20日より７月26日までＡ区調査を行い、平安時代の住居跡３軒、土坑16基、焼土遺構２基、配石墓１基を検出した。Ａ区確認面において焼土分布が広い範囲に見られ、調査の結果焼失家屋と思われる３号住居跡、また住居跡に近接して焼土遺構２基集石土坑１基、配石墓１基が検出し、調査を難行させた。

本調査により確認された遺構は、平安時代の住居跡３軒、土坑17基、焼土遺構２基、配石墓１基、その他地盤沈下跡を検出した。



第２図　五十嵐遺跡全体図

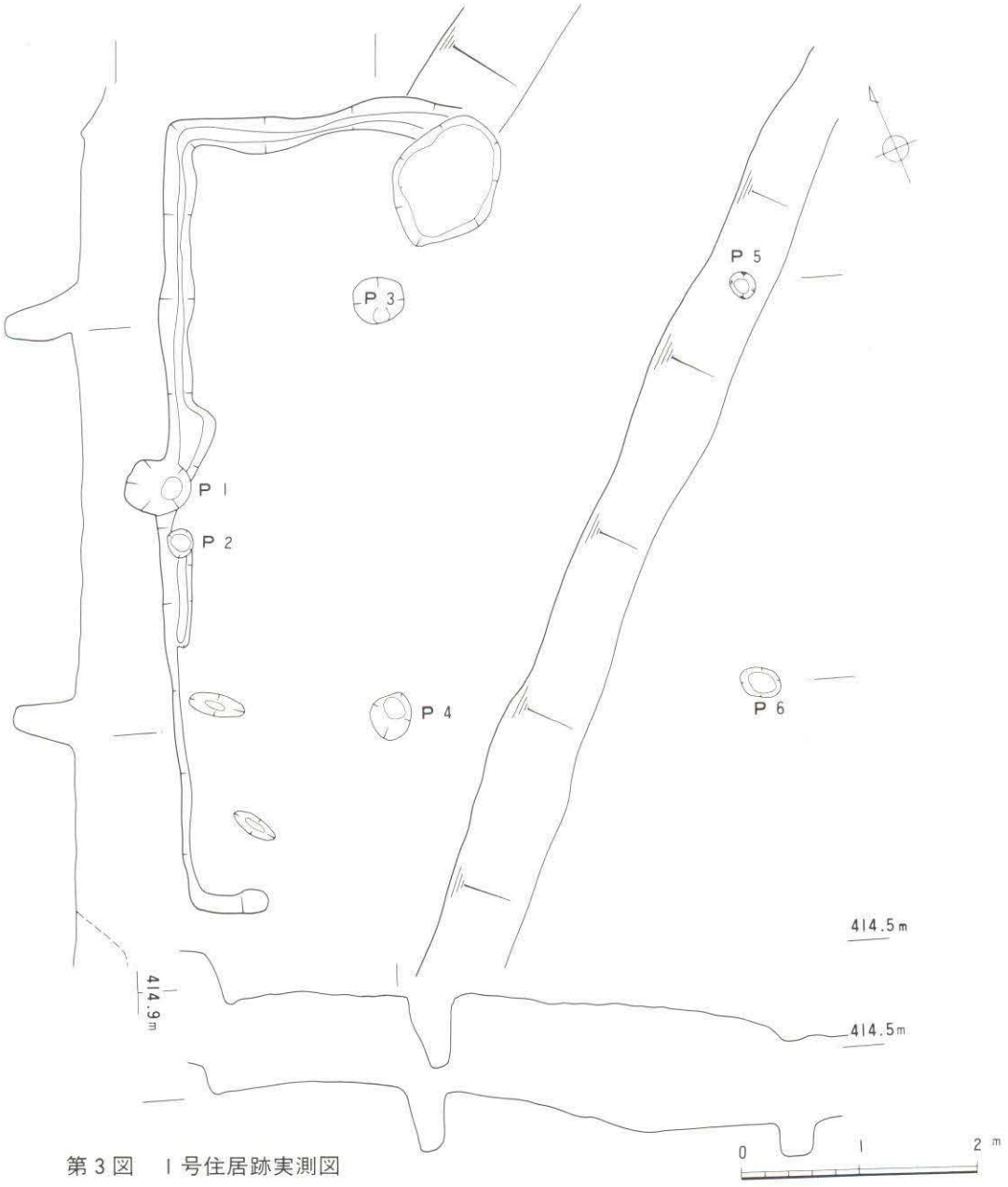
遺構と遺物

１号住居跡　（第３図）

本跡は、Ａ—８・９グリッドに位置する。南東部を溝状遺構に切り取られている。平面形は、主柱穴と思われるＰ３・Ｐ４との壁間隔とＰ５・Ｐ６との間隔より隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は南北 6.7m を測る。壁残存高は西壁で50cmを測り、約70°で立ち上がる。

北壁中央部に皿状の落ちこみを確認した。これは平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 118cm、短軸80cm、深さ14cmを測る。また、西壁中央部及び北壁にかけて壁溝を検出した。深さは２～３cmと浅く、幅７～18cmである。ピットは６本検出され、Ｐ３～Ｐ６は主柱穴と思われる。それぞれの規模はＰ１・長径57cm、短径47cm、深さ54cm。Ｐ２　直径23cm、深さ８cm。Ｐ３　直径42cm、深さ60cm、Ｐ４　長径42cm、短径34cm、深さ54cm、Ｐ５　直径23cm、深さ６cm、Ｐ６　長径36cm短径26cm、深さ26cmを測る。Ｐ３～Ｐ６の底部レベルは同位である。カマドは検出されなかった。

出土遺物は何ら検出されなかった。



第３図　１号住居跡実測図

2号住居跡　（第4図）

本跡は、A—7・8グリッドに位置する。南コーナー部は1号住居跡と切り合うが、関係覆土が耕作土のため新旧は不明である。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は東西4.77m、南北6.23mを測る。壁残存高は西壁で42cm、北壁で17cmを測る。西・北壁共に約70°で立ち上がる。南壁の東側を除き全壁に壁溝を検出した。深さ2cm、幅16～2cmである。ピットは20本検出された。それぞれの規模はP1　長径24cm、短径21cm、深さ21cm、P2　長径30cm・短径23cm・深さ15cm、P3　直径31cm・深さ16cm・P4　直径21cm・深さ25cm、P5　長径30cm・短径6m・深さ17cm、P6　直径17cm・深さ18cm、P7　直径40cm・深さ6cm、P8　直径13cm・深さ6cm・P9　直径22cm・深さ35cm、P10　長径31cm・短径26cm・深さ21cm、P11　長径24cm・短径16cm・深さ15cm、P12　長径18cm・短径10cm・深さ11cm、P13　直径20cm・深さ10cm、P14　長径32cm・短径26cm・深さ11cm、P15　直径24cm・深さ25cm、P16～18　長径63cm・短径51cm、深さP16　32cm　P17　13cm、P18　8cm、P19　長径33cm・短径28cm・深さ26cm、P20　直径24cm・深さ28cmを測る。この内P1・2・3・11・19・20を主柱穴とし、P4・10・14・16を副柱穴と考えられる。床面は南東方向に傾斜し、北壁中央東側より南へ3m、西壁中央北側より東へ85cmの間仕切溝がある。その規模は幅23cm、深さ3cmを呈する。また、西壁中央直下より東側にかけて楕円形状の貼床、北壁からの間仕切溝より東壁にかけて長方形状の貼床が認められた。カマドは検出されなかったが、床面に4ヵ所の焼土分布が検出された。その規模はB1　直径26cm、B2　長径50cm短径41cm、B3　直径32cm、B4　直径30cmを測る。なお、B1の分布はP7よりのかき出しによると思われ、P7は炉の可能性がある。

住居跡内の堆積土（第3～6層）に合わせ、本遺跡土層状態を示す。

第1層　耕作土。下層は白色軽石が集中。

2　　暗褐色土。褐色粒子。白色軽石粒子混入。若干炭化粒を含む。粘性、しまり共にもつ。

3　　暗褐色土。褐色粒子。白色軽石粒子、ローム粒子、炭化粒子を混入、粘性あり。

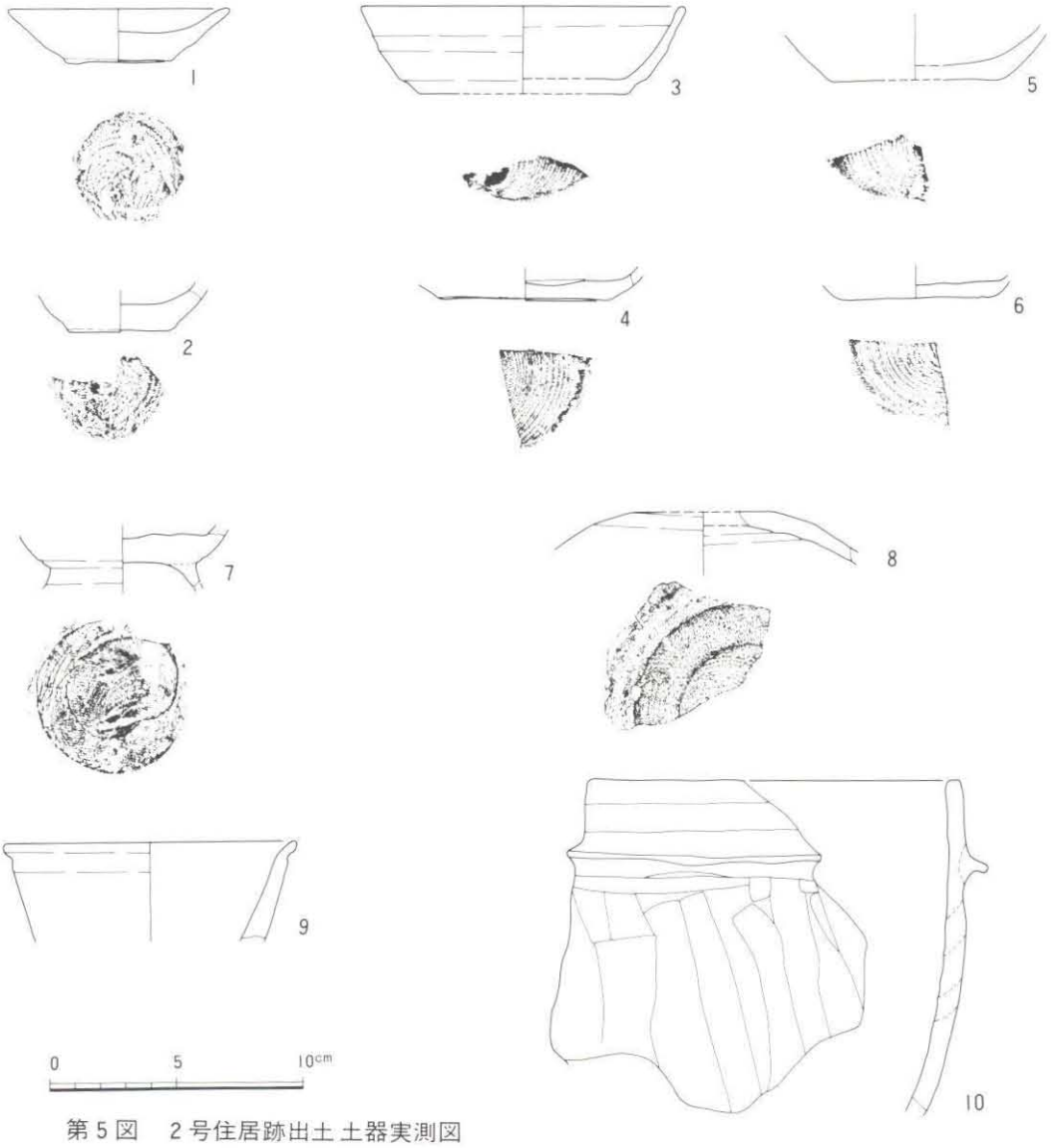
4　　暗褐色土。第3層よりローム粒子混入が多く褐色味が強い。しまりも第3層より強い。

5　　暗褐色土。第4層に比べローム粒子を多量混入。しまりはあまりない。

6　　暗褐色土。ロームブロックが非常に固くある。（貼床）

出土遺物は土器、鉄器が出土した。土器は須恵器砕片が多く図化採拓できたものは10点である。1はP19内より検出し、2と同様の土師質杯。3～7は須恵器杯ロクロ成形、底部糸切りである。7の高台付は、一部高台剥離により底部調整痕があり高台貼り付けが顕著に知れる。8は須恵器蓋である。9は甕、10羽釜は南コーナー部床面に出土した。鉄製品には鉄鏃2点と鍛冶滓形滓3点が検出した。

第4図　2号住居跡実測図　（上段貼床、下段掘り方）



第５図　２号住居跡出土 土器実測図

挿図番号 図版番号	器種 器形	法量（cm） 器高	口径	底径	出土位置	器形、成形、調整の特徴	①胎土②焼成③遺存度④色調⑤備考
図５ 1 図版３	土師器 杯	2.1	8.8	4.2	P19	ロクロ成形、底部で器肉厚い。底部右回転糸切り、底端部未調整。小形で器高極めて浅い。	①細かい、軽石粒(0.5mm) 混入②良好、ザラつく③完形④赤橙色⑤底部より体部の一部口縁にかけて吸炭痕あり。
図５ 2	土師器 杯	1.5 （現）	－	4.0	床面 No.2	ロクロ成形、底部で器厚厚い。底部右回転糸切り。底端部調整。小形で器高極めて浅い。	①荒い。軽石粒(0.5mm) 混入②良好、ザラつく③１／２④赤橙色
図５ 3 図版３	須恵器 杯	3.5	12.7	8.1	覆土	ロクロ成形。器肉ほぼ一定。体外部面ロクロ目強い。底部回転糸切り。	①細かい②良好、軟質③１／４④灰色
図５ 4	須恵器 杯	1.0 （現）	－	6.5	覆土	底部回転糸切り。	①細かい②良好③底部１／４④黒灰色

図5 5	須恵器 杯	2.3 (現)	—	6.6	覆土	ロクロ成形、底部回転糸切り。	①細かい②良好、軟質③1／4④乳白色
図5 6	須恵器 杯	1.1 (現)	—	6.1	覆土	底部回転糸切り。	①細かい②良好、いぶし焼③底部1／4④黒褐色⑤底部吸炭痕あり
図5 7	須恵器 高台付椀	2.3 (現)	—	6.1	床面 No7	ロクロ成形、外面高台接合部ナデ調整。内面ロクロ痕強い。底部高台破損いちじるしく、糸切り痕顕著に残る。	①細かい②ややあまい、軟質③底部のみ④暗黒灰色
図5 8	須恵器 蓋	2.0 (現)			床面 No8	ロクロ成形、外面上半部ヘラけずり調整、天井部に糸切り痕あり。内部ロクロ痕強い。	①細かい②ややあまい、軟質、ザラつく③小破版④灰褐色
図5 9	土師器 甕	3.9 (現)	11.5	—	床面 No9	内外面ヘラ調整、器肉やや厚く、短かい口縁は若干外反する。	①細かい②良好、しまりあり③口縁部3／5④暗褐色
図5 10 図版3	土師器 羽釜	13.2 (現)	—	—	床面 No10	紐つくり、口縁部ナデ、口縁部上段は面どりされている。鍔部は小さく断面台形状。鍔下端部より縦位のヘラけずり。内面横位のナデ調整、指頭痕あり。現状では直線的。	①砂粒含み、荒くザラつく②ややあまい③1／8④茶褐色

第Ⅰ表　2号住居跡出土土器観察表

3号住居跡　（第6図）

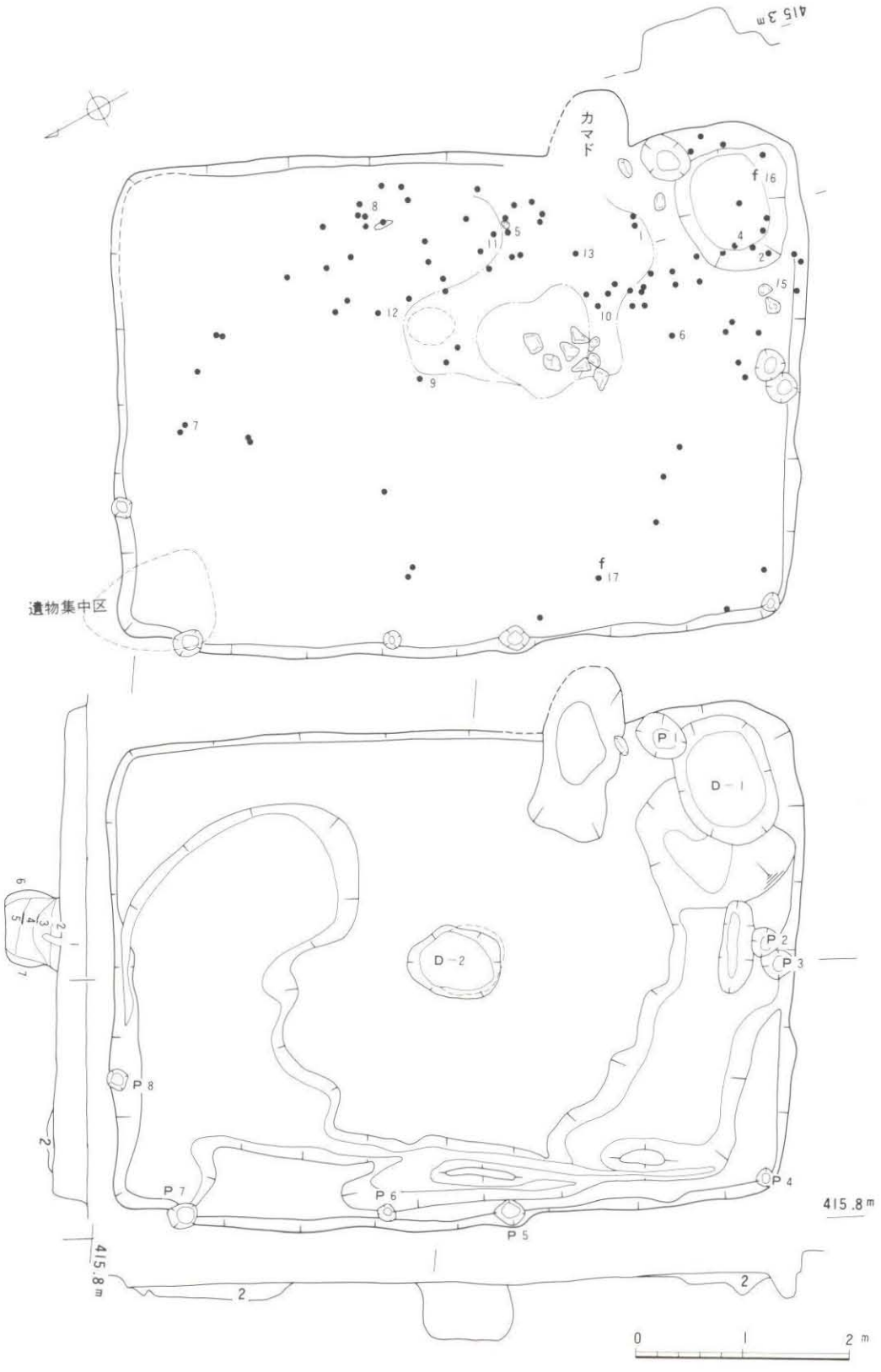
本跡は、A—3・4グリッドに位置する。住居跡の平面形は隅丸長方形を呈し、その規模は南北6.38m、東西4.65mを測る。主軸方位は118°—50′で東偏する。覆土内より多量の炭化物・焼土粒子が中央部から西壁にかけて検出され、特に西壁では長さ60cmの炭化材が出土した。床面はほぼ平坦である。壁残存高は西壁35cm、東壁18cm、北壁9cm、南壁20cmを測る。壁は4壁とも急な立ち上がりである。ピットは8本確認された。規模はP1　長径50cm・短径39cm・深さ61cm、P2　直径28cm・深さ20cm、P3　直径29cm・深さ23cm、P4　直径16cm・深さ16cm、P5　長径28cm・短径23cm・深さ13cm、P6　直径16cm・深さ11cm、P7　直径24cm・深さ22cm、P8　直径19cm・深さ21cmを測る。南コーナーに貯蔵穴（D—1）が確認された。平面形は隅丸長方形で、長軸118cm、短軸102cm、深さ31cmを測る。覆土は暗褐色土（焼土粒子、炭化粒子、白色粘土粒子、褐色粒子を混入。粘性をもつ）である。D—1より須恵器杯片が出土した。本跡床面全域に貼床が認められ、特に東壁側を除き中央部を取囲むように厚さ15～2cmでロームブロックを混入する暗褐色土の貼床を成す。床面中央部において床下土坑（D—2）が検出され、その規模は長軸85cm、短軸71cmの隅丸長方形で、側部南側でオーバーハングする。床部は平坦である。D—2より遺物は検出されなかった。住居跡内の堆積土は

第1層　黒褐色土　褐色粒子、ローム粒子、白色粒子を混入。炭化物、焼土粒子を多量に混入しまり若干弱い、粘性あり。

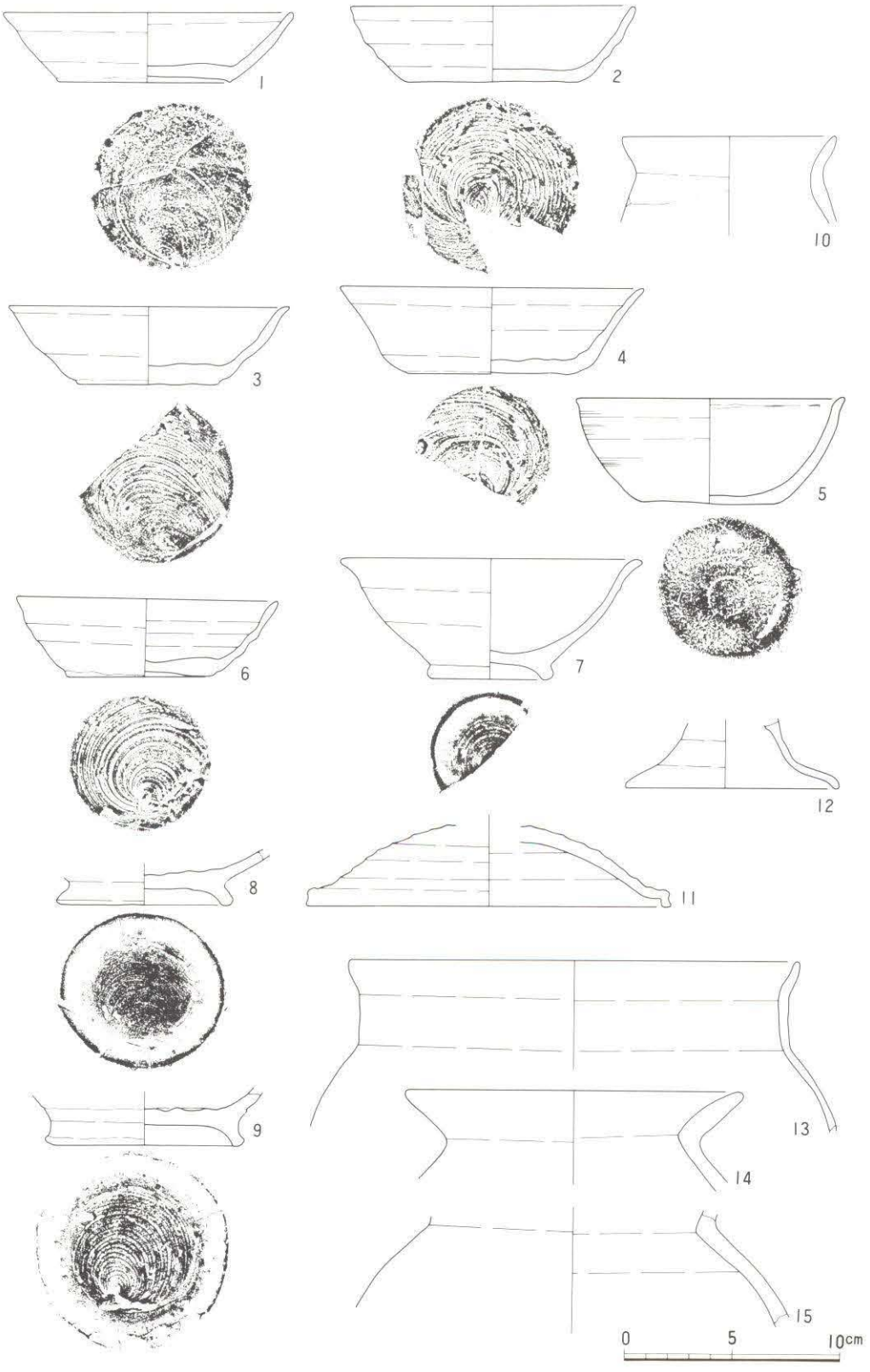
第2層　暗褐色土　ロームブロック混入、しまり非常に強い、貼床層。

第3層　黒褐色土　ローム粒子、白色粒子、灰色粘土粒子混入、しまりややある。

第4層　黒褐色土　ローム粒子を多量に混入し、他に白色粒子、灰色粘土粒子、ローム漸移層



第6図　3号住居跡実測図　（上段貼床、下段掘り方）



第７図　３号住居跡出土土器実測図

ブロックを混入する。しまりあり。

第５層　黒褐色土。ローム粒子、ロームブロック、ローム漸移層ブロックを混入する。

第６層　黒褐色土。ローム粒子を混入。しまりなし。

第７層　黒褐色土。６層同様であるが、黒色味が弱い。

カマドは、東壁南コーナーよりに位置する。北側は耕作により削平される。プランは馬蹄形を呈し、東壁を掘り込んで構築される。全長 118cm、焚口幅90cmを測り、方位はN—130°—Eを示す。掘り方は床面より11cm位楕円形に掘り込み、火床としており、約50°の傾斜で煙道部が立ち上る。焼土部は２層あり、上部焼土は２cm位堆積、下部焼土は８cm程堆積する。焚口部右袖に平い安山岩を用い、袖石補強に粘土がある。この粘土は火炎のため堅く、ぼろぼろであった。

挿図番号 図版番号	器種 器形	法量（cm） 器高	口径	底径	出土位置	器形、成形、調整の特徴	①胎土②焼成③遺存度④色調⑤備考
図７ １ 図版３	須恵器 杯	3.2	13.4	8.0	底面 No.1	ロクロ成形。器肉一定。底部右回転糸切り。端部無調整。底部やや上底ぎみ。見込部ロクロ目強い。底径大きく器高が低い。	①細かい、軽石粒(0.5mm)混入②良好ザラつく③完形④灰色、内面片側褐色味をおびる⑤底部内外面に吸炭痕あり
図７ ２ 図版３	須恵器 杯	3.6	13.2	7.9	D1	ロクロ成形。器肉一定。底部右回転糸切り。見込部ロクロ目強い。	①細かい②良好、軟質③１／５欠損④外面灰色、内面白灰色
図７ ３ 図版３	須恵器 杯	3.65	13.4	6.6	覆土	ロクロ成形。器肉一定。口縁部若干外反。底部右回転糸切り。底径やや小型であるのに対し、器高若干深い。	①細かい、軽石粒(0.5mm)混入③良好③２／３欠損④暗灰色⑤底部から体部に吸炭痕あり。
図７ ４ 図版３	須恵器 杯	4.0	14.2	7.6	D1	ロクロ成形。器肉一定。口縁部若干外反。底部右回転糸切り。見込部ロクロ目強い。	①細かい②良好、軟質③２／３④外面灰色、内面白灰色⑤２．４は同窯で焼かれた可能性あり。
図７ ５ 図版３	須恵器 杯	4.8	12.4	6.2	床面 No.5	ロクロ成形。器肉一定。体部下部より底部回転ヘラ削り。内面方射状の磨き。	①細かい②良好③体部２／３欠損④外面暗灰色、内面黒色⑤内面黒色処理、光沢あり、瓦器質。
図７ ６ 図版３	須恵器 杯	3.7	12.2	6.7	床面 No.6	ロクロ成形。器肉一定。体部外面ロクロ目強い。底部右回転糸切り。底端部未調整。見込部ロクロ目強い。	①細かい、軽石粒(0.5mm)混入②ややあまい、若干ザラつく、酸化焔焼成④淡橙色⑤底部より体部下部に吸炭痕
図７ ７ 図版３	須恵器 高台付椀	5.6	14.0	5.8	床面 No.7	ロクロ成形。底部回転糸切り。口縁部外反。体部若干ふくらむ。断面台形状の短かい高台貼付。底部回転糸切り。底部端部ナデ調整	①細かい②良好、軟質③１／２④乳白色
図７ ８	須恵器 高台付椀	2.4 （現）	－	8.6	床面 No.8	ロクロ成形。底部回転糸切り。見込部ロクロ目強い。「ハ」の字状に大きく広く高台貼付。腰部高台内部ナデ調整。	①細かい②良好、軟質③底部のみ④淡灰色⑤底部吸炭痕あり。
図７ ９	須恵器 高台付椀	2.4 （現）	－	9.0	床面 No.9	ロクロ成形。底部右回転糸切り。端部ナデ調整。見込部ロクロ目強い。高台貼付ザツ。腰部・高台ナデ調整。	①細かい、軽石粒0.5mm）混入②良好③底部のみ④淡褐色⑤底部吸炭痕あり。
図７ 10	土師器 小型甕	3.9 （現）	9.8	－	床面 No10	口縁部「ク」の字状を呈く、若干外反する。口縁部内外面横位ナデ調整。肩部横位ないし斜位のヘラけすり調整。	①細かい②良好、しまりあり③口縁部から肩部３／４④淡橙色
図７ 11 図版３	土師器 台付甕脚部				床面 No11	内外部ナデ調整「ハ」の字状に広がる。	①細かい②良好、しまりあり③脚部のみ④赤褐色
図７ 12	須恵器 蓋	3.7 （現）	－	16.8	床面 No12	側辺部は直立し、ややふくらみをもって天井に至る。外面体部下半ロクロ成形。外面体部上半部回転ヘラけすり調整。	①細かい②良好③１／２弱④黒灰色
図７ 13	土師器 甕	8.1 （現）	21.0	－	床面 No13	口縁部「コ」の字状を呈し、肩部に若干張る。口縁上端部はヘラ状工具による沈線状のくぼみあり。口縁部ナデ。肩部横位及び斜位のナデ調整。	①細かい②良好③口縁部から肩部1/2④淡褐色⑤一部に吸炭痕あり

図7 14	土師器甕	4.2（現）	15.6	—	床面 No.14	口縁部「ク」の字状に強く外傾する。内外部ナデ。	①細かい②良好、しまり強い③口縁部1／2④暗褐色⑤口縁部にすす状の付着あり
図7 15	土師器甕				床面 No.15	ナデ調整。くびれ部に櫛歯状工具によるナデ痕跡あり。肩部内面指頭痕あり。	①細かい②良好③高部1／3④暗褐色

第2表　3号住居跡出土土器観察表

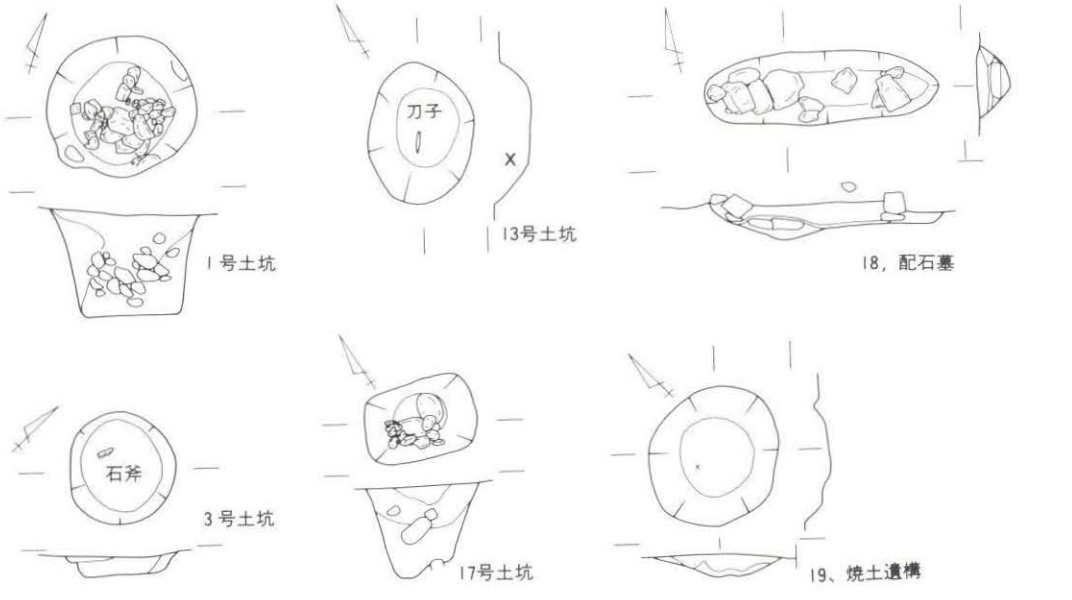
土坑、焼土遺構、配石墓

本遺跡において土坑17基、焼土遺構2基、配石墓1基が確認された。遺構確認面は1～12、14号土坑はローム面、13・15～17号土坑、焼土遺構2基、配石墓は暗褐色土層で検出した。17基の土坑のうち7基は、C—3・4グリッドに集中する。本遺跡土坑等について規模・形態を一覧表にし、特異なものについて図化した。

番号	形 平面	形 断面	規模(cm) 長径	規模(cm) 短径	規模(cm) 深さ	位置 グリッド	出土遺物	備考
1	円	U	118	118	83	B−11		集石
2	円	Ⅲ	79	78	14	B−2		
3	円	Ⅲ	90	84	15	C−3	石斧	
4	円	Ⅲ	100	94	15	C−3		
5	円	U	56	54	24	C−3		礫2個
6	楕円	Ⅲ	137	115	13	C−3		
7	円	Ⅲ	76	69	30	C−3		
8	円	Ⅲ	126	123	30	C−4		
9	円	U	72	59	40	C−4		
10	円	U	47	47	5	A−3		

番号	形 平面	形 断面	規模(cm) 長径	規模(cm) 短径	規模(cm) 深さ	位置 グリッド	出土遺物	備考
11	円	U	80	61	40	A−3		
12	円	U	42	40	33	A−3		
13	楕円	Ⅲ	113	82	22	A−3	刀子	
14	長方形	⊔	164	90	20	B−7		
15	円	U	79	53	35	A−5		
16	隅丸方形	Ⅲ	126	110	26	A−7		
17	隅丸方形	U	91	59	71	A−6	骨片	集石、炭化物混入
18	長楕円	Ⅲ	184	57	25	A−6		配石墓
19	円	Ⅲ	103	103	21	A−3	須恵器杯片	焼土遺構
20	不明				30	A−6	骨片	焼土遺構

第3表　土坑、焼土遺構、配石墓　観察表

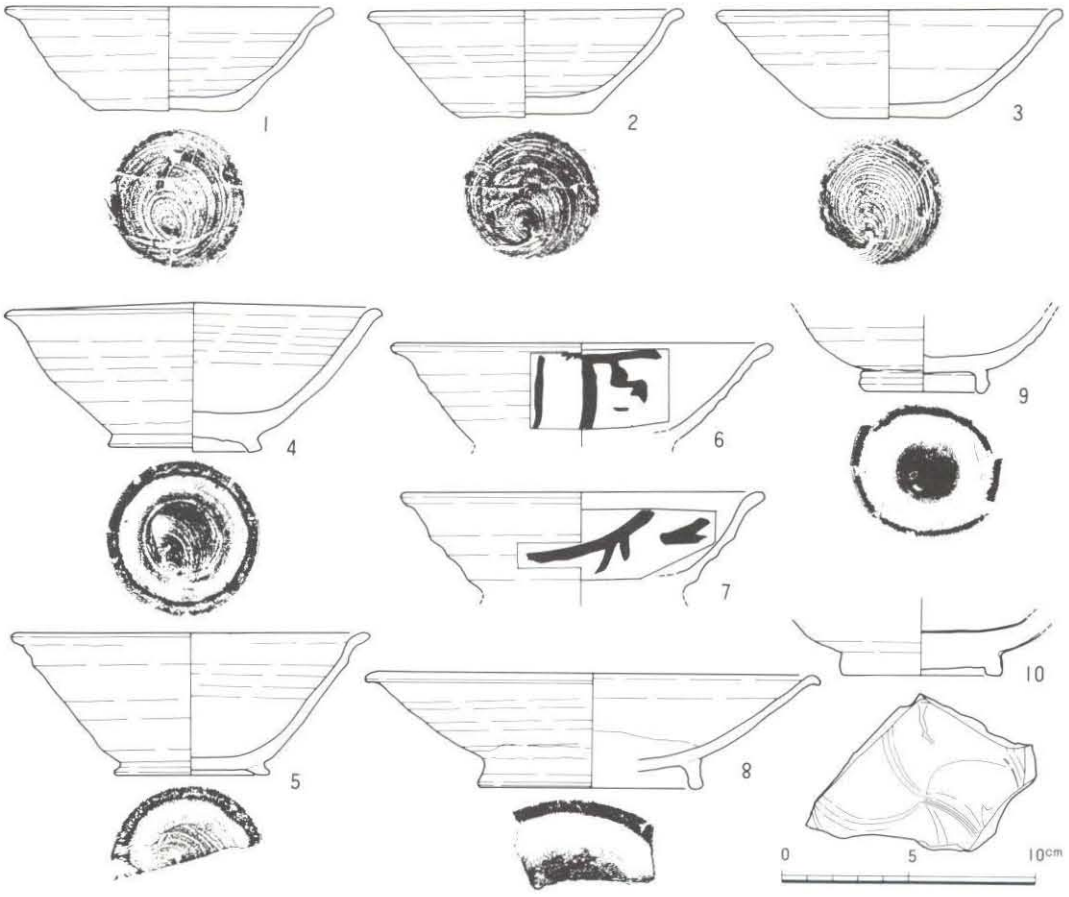


第8図　土坑、焼土遺構、配石墓実測図

遺物集中区、その他の遺物

遺物集中区は、A—4 グリッド、3 号住居跡北コーナー部に位置する。平面形は台形状を呈し長軸 1.2m、短軸 0.9mでレンズ状にあり、3 号住居跡床面とのレベル差は12cmを測る。

また、その他の遺物として平安時代のグリッド出土遺物も合わせ記す。



第 9 図　遺物集中区、その他の遺物実測図

挿図番号 図版番号	器種 器形	法量(cm) 器高	口径	底径	出土 位置	器形、成形、調整の特徴	①胎土②焼成③遺存度④色調⑤備考
図 9 1 図版 4	須恵器 杯	4	12.9	5.5	集中区	ロクロ成形。器肉ほぼ一定。口縁部強く外反。見込部ロクロ目強い。底部右回転糸切り。端部無調整。	①細かい。軽石粒(0.5mm) 混入②ややあまい、軟質③2／3④白灰色⑤内外面に吸炭痕あり。
図 9 2 図版 4	須恵器 杯	4.2	12.4	5.0	集中区	ロクロ成形。器肉一定。体部直線的。口縁部強く外反。見込部ロクロ目強い。底部右回転糸切り。	①細かい②良好、軟質③3／4④白灰色⑤内外面吸炭痕あり。
図 9 3 図版 4	須恵器 杯	4.3	13.5	4.6	集中区	ロクロ成形。器肉ほぼ一定。口縁部外反。見込部ロクロ目強い。底部右回転糸切り。端部無調整。	①細かい②良好、軟質③5／6欠損④灰白色⑤内外面吸炭痕あり。

図9 4 図版4	須恵器 高台付椀	5.8	14.8	6.0	集中区	ロクロ成形。底部器肉厚い。口縁部外反。腰部・高台内外ナデ調整の外傾する短い高台。底部回転糸切り。	①細かい、小石混入②ややあまい、軟質③完形④白灰色
図9 5	須恵器 高台付椀	5.6	14.0	6.0	集中区	ロクロ成形。器肉一定。口縁部外反。腰部・高台内側ナデ調整。外傾する短い付高台。底部回転糸切り。	①細かい、軽い②良好、軟質③1／3④白灰色、いぶしあり、黒色光沢なし
図9 6 図版4	須恵器 高台付椀	4.0 (現)	15.0	－	集中区	ロクロ成形。器肉一定。口縁部外反。腰部ナデ調整（横位）。外部・外面墨書痕あり『酒』？	①細かいがやや雑②良好、軽くざっくりしている③体部1／3④灰白色
図9 7	須恵器 高台付椀	4.0 (現)	14.4	－	集中区	ロクロ成形。体部外面ロクロ目強い。口縁部外反。体部内面墨書痕あり文字不明。	①細かい、軽い②良好③体部1／3④白灰色
図9 8 図版4	灰　釉 陶器椀	4.5	18.0	8.8	表　採	体部ハの字状に大きく開き、口縁部外反する。高台は高く台形状を呈する。底部回転ヘラ切り端部ナデ。底部見込部を除き施釉刷毛塗り。	①やや荒い②良好③1／3④にぶい黄橙色
図9 9 図版4	灰　釉 陶器椀	3.0 (現)	－	4.8	A－3	体部下半は丸味をもつ。高台は三日月型を呈するが、稜の張りはさほどない。腰部・高台内側ナデ、底部回転ヘラ切り。内面見込部を除き施釉。	①良好②良好 ③体部～口縁部欠損 ④灰白色
図9 10 図版4	青磁椀	2.2 (現)	－	6.3	A－5	台形状の厚い高台を有する。釉薬はさほど厚くない。現形で底部を除いて施釉。見込部に片切り、彫花文が施される。	①良好②良好③底部2／3④にぶい黄橙色

第4表　遺物集中区、その他の遺物観察表

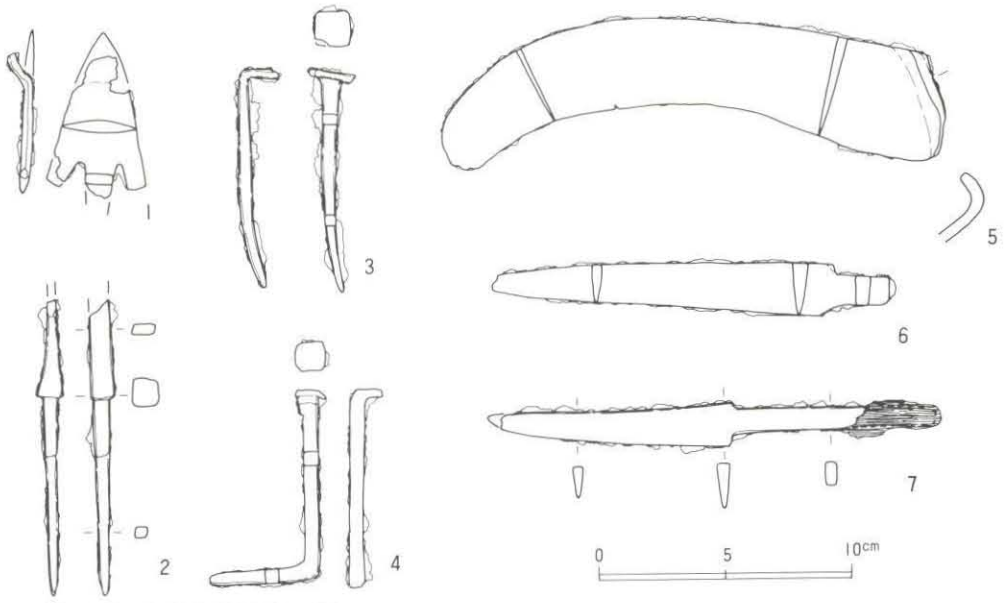
出土鉄製品

本遺跡より検出された鉄製品は、2・3号住居跡及び13号土坑の3遺構から出土している。

2号住居跡からは第10図1・2の鉄鏃2点と鍛冶塊形滓3点が検出されている。3号住居跡からは、鎌1点、刀子1点、釘1点、不明5点、鍛冶塊形滓2点の合計11点が検出されている。また、13号土坑床直では第10図7の刀子が1点検出している。

No.	出土位置	製品名	遺存状態	現存計測数値(cm)（g）							備　考
				長さ		幅		厚さ		重量	
1	2号住床面 No. 11	鏃	基部欠損	5.5		根 茎	2.9 1.1		0.4	16	
2	2号住床面 No. 12	鏃	先端欠損	11.7		篦被 茎	1.0 0.4	篦被 茎	1.0 0.4	14	
3	3号住床面 No. 16	釘	完　存	8.7		皿 幹部	1.4 0.5	皿部 幹部	0.3 0.5	10	
4	3号住覆土	不　明		7.9		皿部 幹部	1.2 0.6	皿部 幹部	0.3 0.6	16	
5	3号住床面 No. 17	鎌	完　存	19.8			4		0.36	106	基端部に折り返しを有する床直で出土
6	3号住覆土	刀　子	完　存	身 茎	13.8 2.2	身 茎	2.0 1.1		0.6	43	
7	13号　土坑	刀　子	完　存	身 茎	9.3 8	身 茎	1.8 1.0		0.5	31	床よりやや浮いて出土

第5表　出土鉄製品観察表

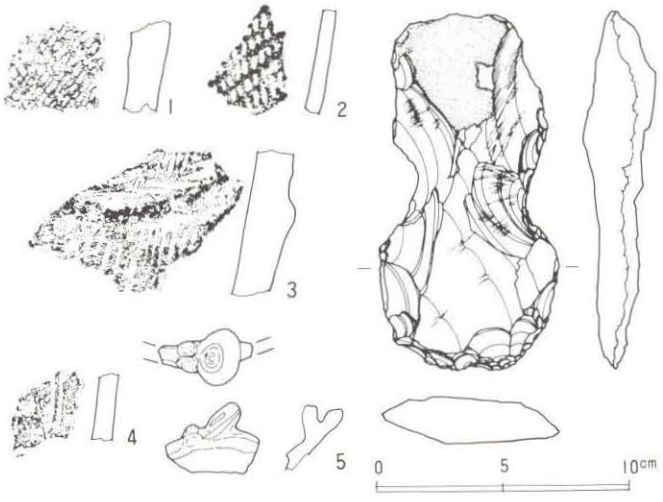


第10図　出土鉄製品実測図

その他の時代

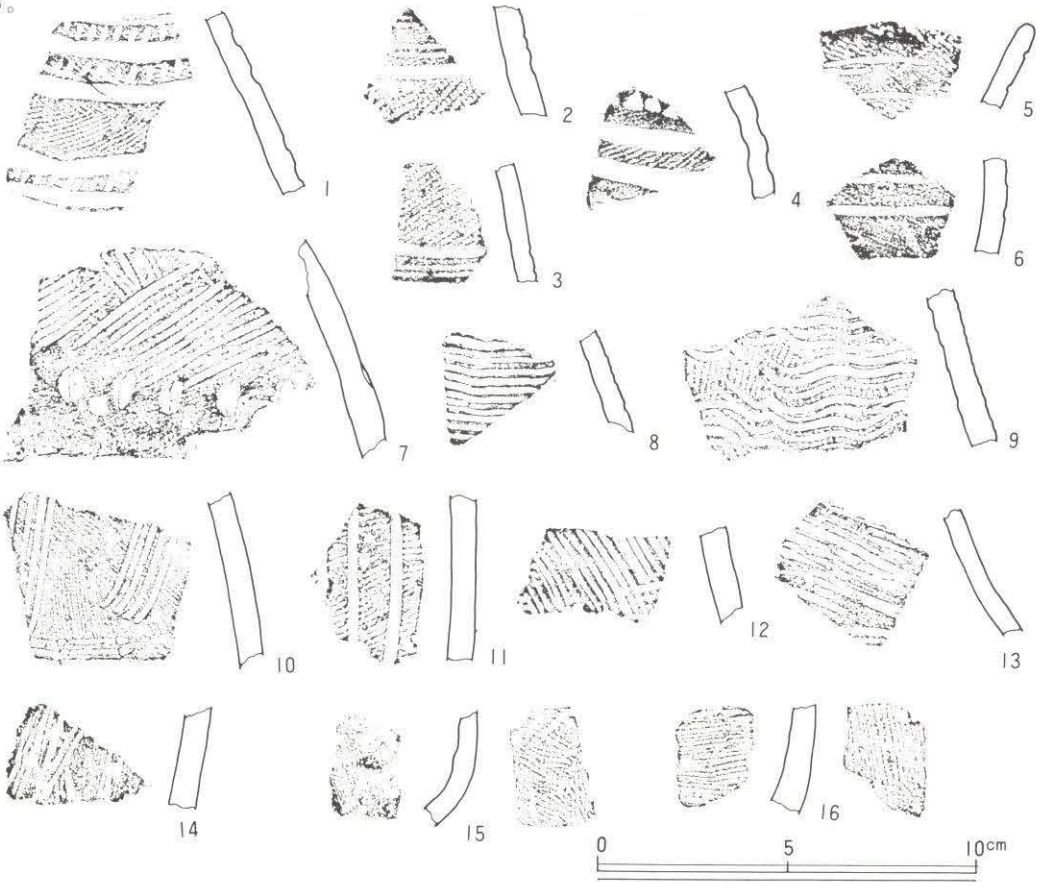
縄文時代　本遺跡の縄文時代の遺構は１～12・15号土坑がそれにあたる。土坑内からの遺物は非常に少なく、打製石斧、石鏃各々１点が検出されただけである。遺跡の性格は土坑群であり、下図の５点が包合層内出土土器である。１は繊維を含有する。縄文前期。２は圧痕縄文である。３は口縁下部で隆帯により区画され、棒状工具により稜杉文状の文様を施している。４は無文に半截竹管による平行沈線を垂下させている。３・４は縄文中期、５は口縁部装飾突起である。縄文後期。６は打製石斧である。本遺跡における出土土器は微量であるが、出土石器はそれよりやや多い。石器総数は38点である。石器種類内訳は、石鏃１点、打製石斧３点、削器３点、凹石１点不定形石器３点、剝片27点である。

弥生時代　本遺跡において弥生時代の遺構は確認されなかったが、包含層内出土土器のほとんどが第12図の弥生中期の土器群である。１～４は頸部から肩にかけての破片である。１は細かな羽状縄文を地文に深い横走沈線で文様構成し、沈線間に刺突を施している。２・３は縄文を地文に浅い横位沈線を有する。４は細かな縄文を地文に深い沈線区画を行ない三角刺突を



第11図　縄文土器拓影図及び石器実測図

施している。5は反撚の縄文R$\frac{R}{R}$を地文に横位沈線文を有する口縁部である。6は無文に横位沈線を有する。7は6本単位の工具により荒い羽状文を施され、その直下に指ツメ先による刺突文が等間隔に施されている。8・10は細かい刷毛目を地文に8は横位沈線、10は4本目櫛歯による斜方向のカキ目がありその下に横走する等間隔止めの簾状文を施している。9・11は縄文を地文に粗い櫛歯状工具による波状文が横走する。11は棒状工具により4本垂下する沈線が施してある。12・13・14は条痕文である。12の条痕は工具が一定した整ったものを使用している。13の条痕は頸部よりでは斜方向、肩部では横方向の条痕が施されている。15・16は表裏条痕文土器である。



第12図　弥生土器拓影図

おわりに

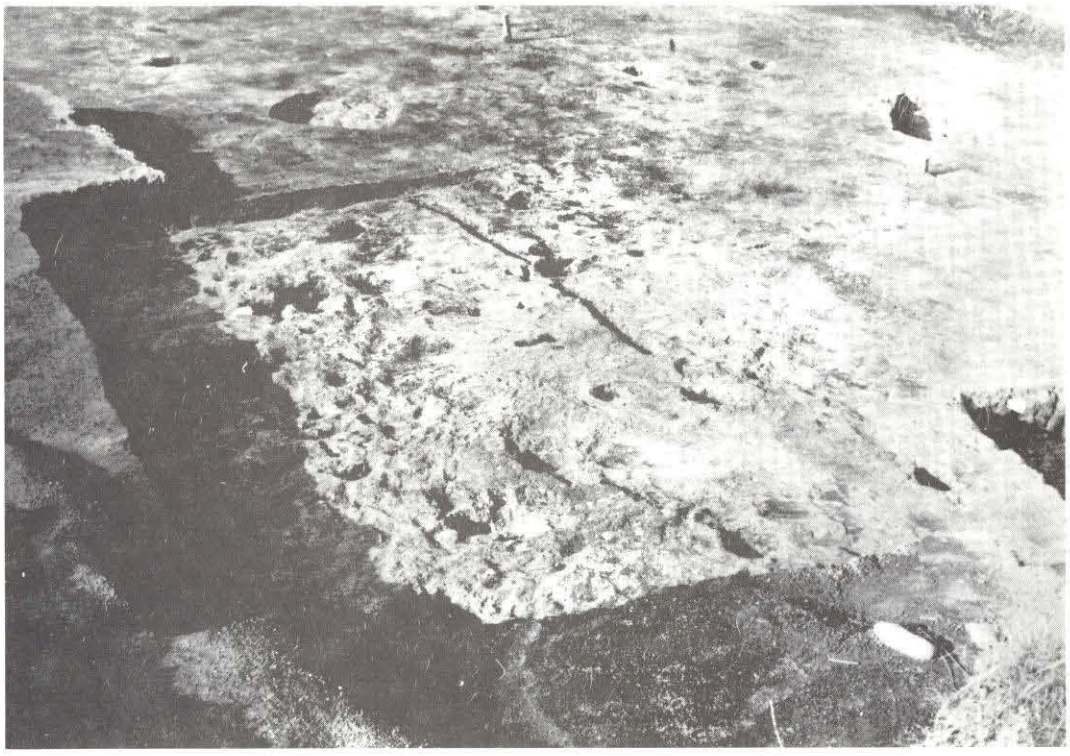
本年度の発掘調査により平安時代の住居跡等が確認されたことから従来いわれた縄文時代の遺跡は本遺跡扇状地より高い台地であることが予想される。来年度において引き続き同地域の発掘調査が行われるため発掘調査報告書はその終了後出すことにし、今回は概要報告とした。

発掘調査及び概要報告書作成にあたり、御支援、御助言をいただいた関係諸機関、関係者各位に深く感謝の意を表する次第である。

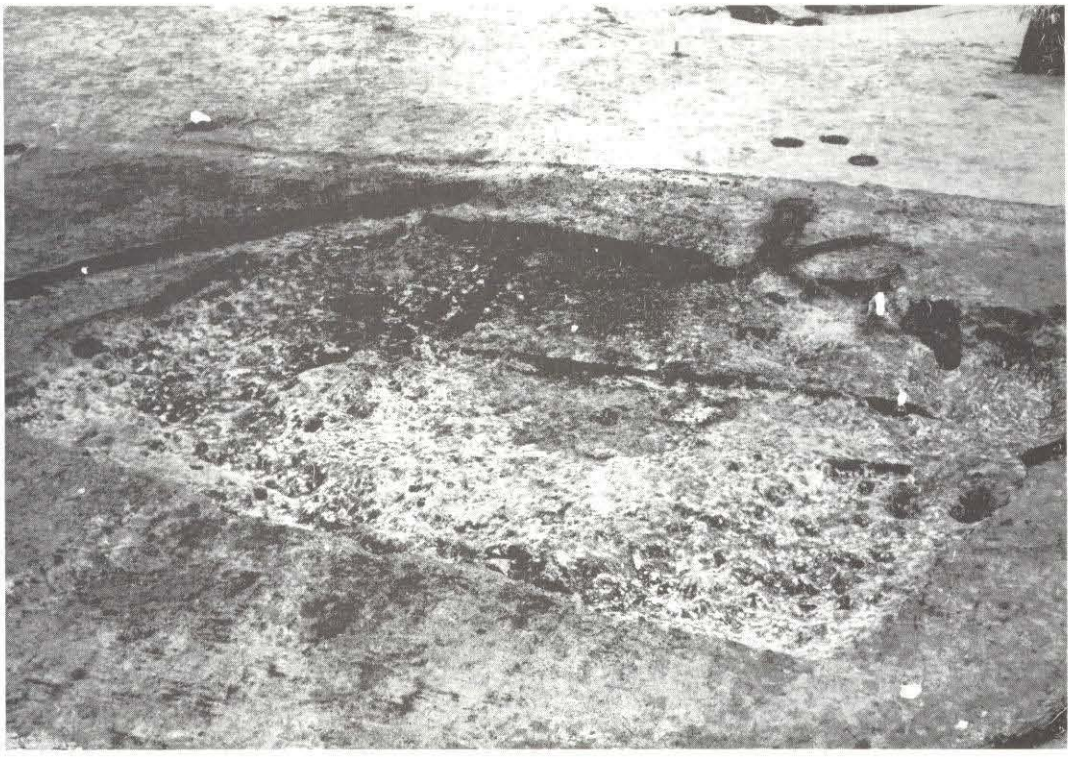
五十嵐遺跡　遠景

五十嵐遺跡　発掘調査区

図版 I

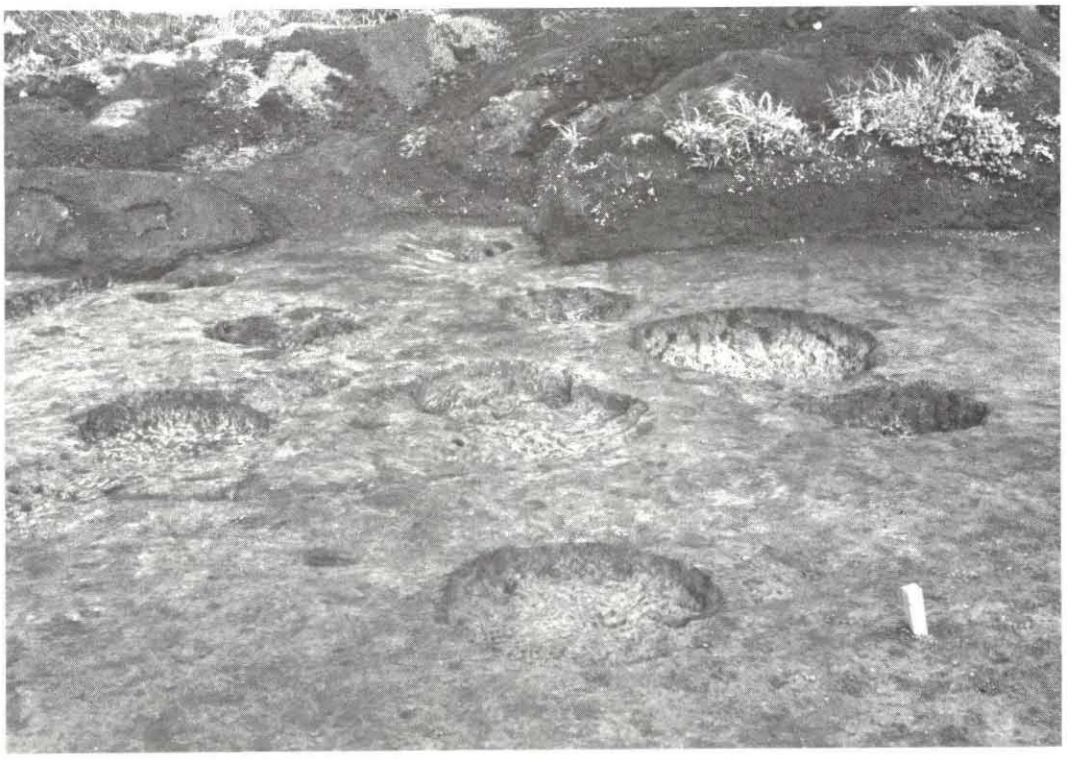


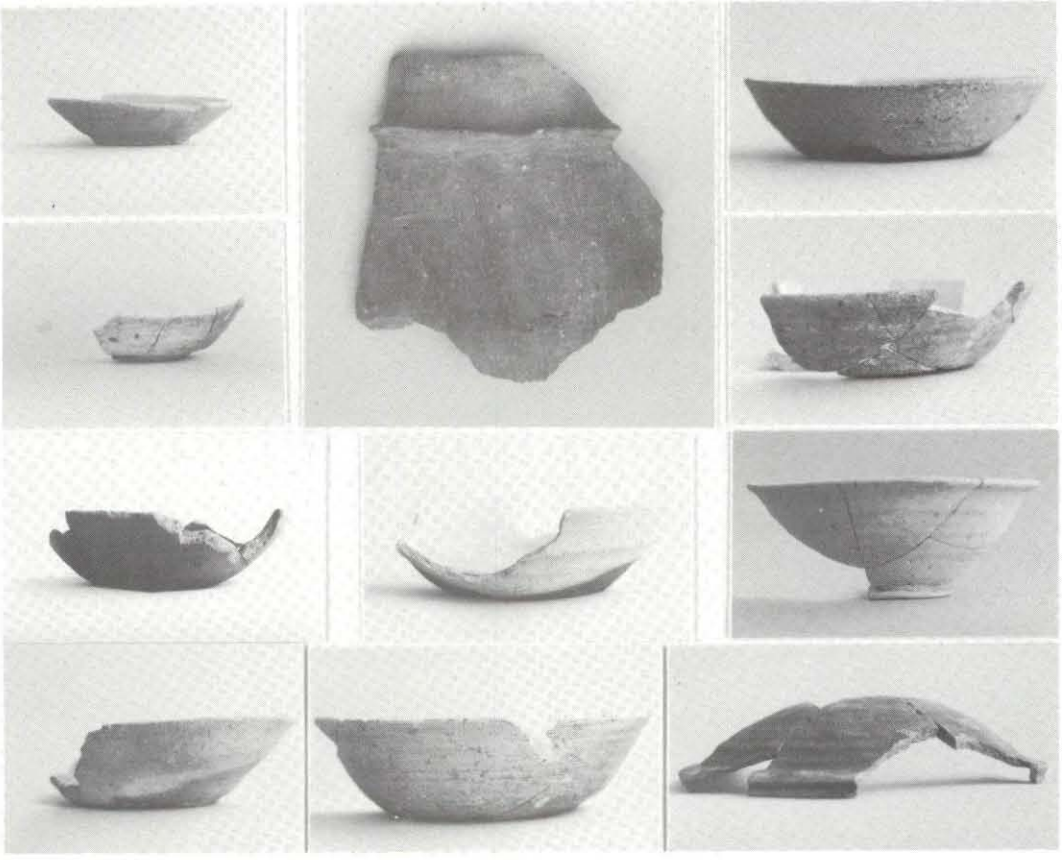
2 号住居跡



3 号住居跡

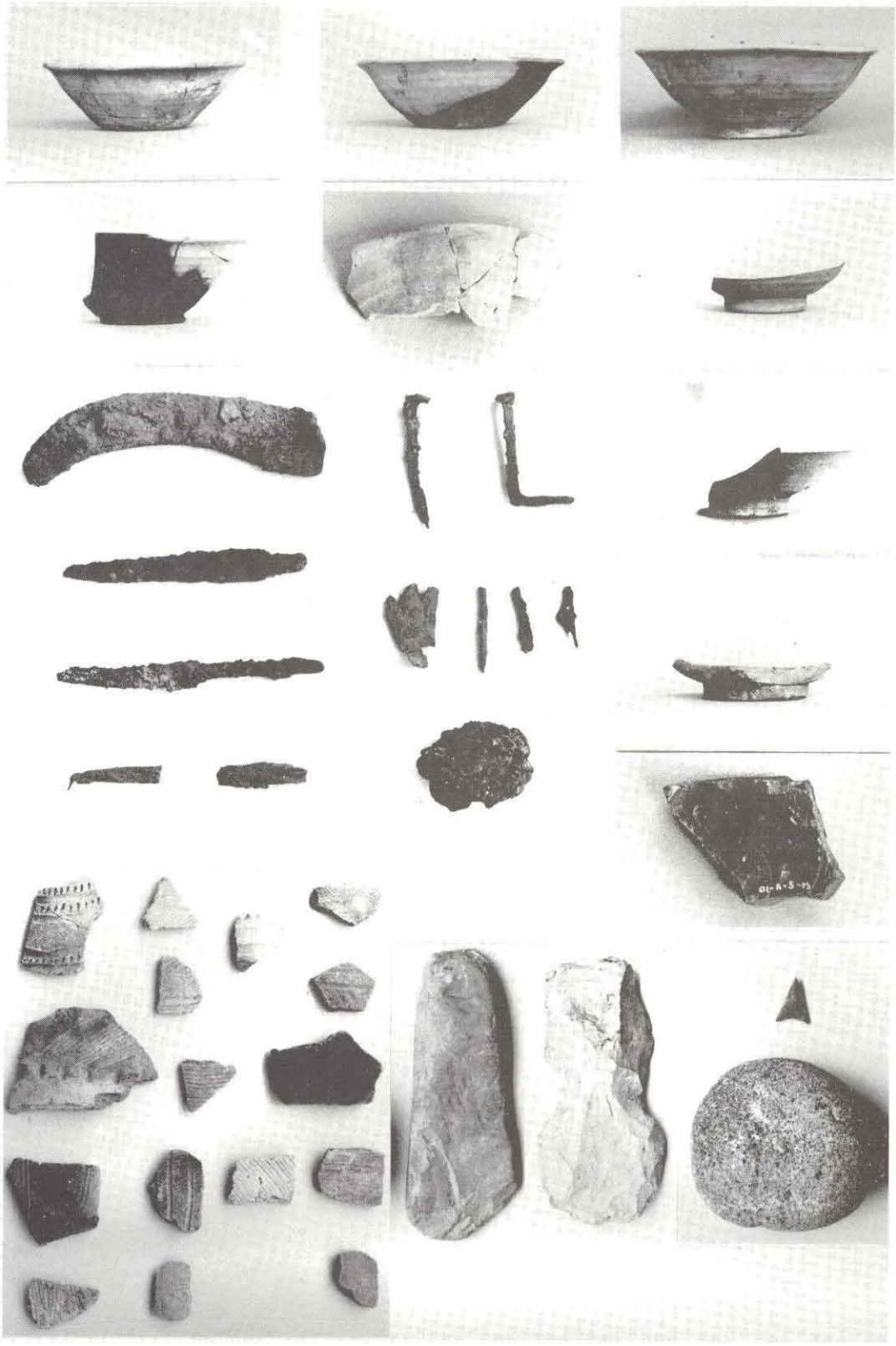
図版 2





上：土坑群　　下：2号住居跡・3号住居跡出土土器

図版 3



出土遺物（遺物集中区・その他の遺物・鉄製品・その他の時代）

図版 4

大塚遺跡群五十嵐遺跡発掘調査概報

印刷　昭和60年３月30日
発行　昭和60年３月30日

編集　群馬県吾妻郡中之条町教育委員会社会教育課
発行　群馬県吾妻郡中之条町教育委員会
〒377－04 吾妻郡中之条町大字中之条町1091
電話　0279－75－２１１１

印刷　小　池　印　刷